

胡鬚赤と赤鬚胡

鈴木 哲雄

一 永平広録と正法眼蔵

近年『永平広録』を読みはじめ、「將謂胡鬚赤更有赤鬚胡」という語があり、それが何を言おうとしているのか、どうもわかりにくく、少しでも明らかにする手がかりが得られればという思いで研究したのが拙論である。

広録を読んでいる中で、広録は『正法眼蔵』との関係が深いこともはつきりしてきた。広録は漢文体の公式の上堂語を集録し、眼蔵は和文体の示衆である。表面上この両者には、短と長、略と密、敵と親というような違いもみられる。広録は和語ではないだけに、短文ということもあって、微妙な表現、繊細な表現は眼蔵には及ばない。広録のいわんとする意図を明確にするには、関連する内容が眼蔵にあれば、それを参照すべきことは必須となる。特に両者がお互いに近い年の文であるならば、意味をとる上で大いに参考となる。両者の関係は上堂語が先にあり眼蔵が後になるという例が多い

が、その逆の場合もある。特に両者の表現が近い場合、前者は眼蔵が上堂語の内容を、別時に詳細に説いているという姿でとらえられ、後者は眼蔵の語を、広録が略して基本だけを説いたという姿でとらえられる。眼蔵の研究が広録を参照すべきであるとするよりも、広録の研究が眼蔵を参照すべきであるとする方が、重要度が高いといわなければならない。公式表現の上堂語は、雁立聴取することからも、理解が浅きに流れる傾向は否めない。眼蔵の示衆において、親切丁寧に解説されたという見方もでき、修行者の参学眼を深めさせていったのである。

二 胡鬚赤赤鬚胡の使用例

胡鬚赤赤鬚胡の語の使用についても、広録と眼蔵の両方からみなければならない。その使用例を両本から抽出し、年代順に並べてみよう。広録の上堂年月日は、伊藤秀憲『永平広録』説示年代考』を通して、独自に推定したものであり、

使用書は春秋社版『道元禪師全集』第三、四巻で、上堂番号はその通し番号である。眼蔵は同第一、二巻である。

① 62上堂。拳百丈野狐話了云、將為胡鬚赤、希有赤鬚胡。不落与不昧、因果更因果。(以下略) 仁治二年(一二四一)七月十五日ごろ。

② 「行仏威儀」(前略) 將謂赤鬚胡のみならんや、さらにこれ胡鬚赤なり。 仁治二年十月中旬。

③ 「阿羅漢」(前略) 阿羅漢の神通・智慧・禪定・説法・化導・放光等、さらに外道・天魔等にひとしかるべからず。見百仏世界等の論、かならず凡夫の見解に準ずべからず。將謂胡鬚赤、更有赤鬚胡の道理なり。(以下略) 仁治三年五月十五日。

④ 「大修行」(前略) しかあれどもいふべし、百丈道処通方、雖然未出野狐窟、黄栗脚跟点地、雖然猶帶螳螂尾、与掌拍手、一有二無、赤鬚胡胡鬚赤。 寛元二年(一二四四)三月九日。

⑤ 212上堂、云。非但曹谿無、西天竺亦無。会仏法人得、和尚還不得。露柱是古仏、燈籠新如来。這箇是長連村上学得底。向上又如何。良久云、將謂胡鬚天下赤、元来更有赤鬚胡。 寛元四年十二月初ごろ。

⑥ 314上堂。狗子趙州無仏性、吾孤負汝。不為方法為侶、汝孤負吾。將謂胡鬚赤、更有赤鬚胡。(以下略) 建長元年(一二四九)三月一日ごろ。

⑦ 402上堂。(中略) 若論仏祖心者、牆壁瓦礫是也。其眼者、木楔子是也。其鼻者、如截筒是也。其舌者、如初偃月是也。怎麼

胡鬚赤と赤鬚胡(鈴木)

參学来時、又作麼生。良久云、將謂胡鬚赤、更有赤鬚胡。 建長二年十一月十日ごろ。

⑧ 436上堂。(中略) 永平今有山偈。良久云、翠竹桃華是画図、胡蘆藤種纏胡蘆。 胡鬚赤更赤鬚胡。喫粥了兮洗鉢盂。 建長三年六月五日ごろ。

⑨ 482上堂。(中略) 測知、坐禪其功德最勝甚深。乃云、在单多劫參禪客、還見一条拄杖烏。正当怎麼時、更有脱落底道理也無。良久云、將謂胡鬚赤、更有赤鬚胡。 建長四年一月二十日ごろ。

用例は以上である。もう一つ広録80上堂に、「有赤鬚胡之識知、有胡鬚赤之識知」という語があるが、当面の問題に当らないので除外する。

この語の使用頻度はさほど多くないが、道元においてずっと使われていた語であるとわかる。そして文末のしめくくりに使われることが多く、文末でなくても、文脈の一区切りつくところにおいて用いられ、何かしらの言い回しにおいて非常に都合のよい表現であったらうと推察される。

三 胡鬚赤赤鬚胡の出典と内容

道元は「深信因果」において文頭にこの公案を出し(全集巻二、三八七頁)、「この一段の因縁、天聖広燈録にあり」と述べているので、出典は広燈録のようにみえる。自らの真字

『正法眼蔵』巻中、一〇二則にこれを出し、これと文字はほとんど同じであるから、真字を引いたというべきである。真字の場合、広燈録の文字と一致しないところが多い。『禪宗頌古聯珠通集』に引くところとも違う。道元はこの両書を見ているわけではあるが、全集巻五、一七八頁で石井修道氏が脚注に指摘しているように、『宗門統要集』巻三の百丈懷海章に出る文と一致する。

この公案はいわゆる「百丈野狐話」といわれるものである。多分一〇三〇年ごろこの公案が世に現われたと思われる、安徽地方でこの公案が発生したのではないかと感じられる。この公案の内容は次のごとくである。

百丈懷海のところではいつも老人が説法を聞いていたが、ある時居残って、身を明かし、法を問うた。自分は過去世迦葉仏の時、この百丈山で説法していたが、学人に大修行の人は因果に落ちるかと問われ、因果に落ちないと答えたところ、五百生間、野狐身に墮してしまった。そして懷海に野狐身を脱せしめてほしいと願う。そこで懷海は拳せしめて、「因果に味からず」と答えた。老人はすつと姿を消した。懷海は山後の巖下で死んでいた野狐を大衆と共に、亡僧の法で火葬した。晩間上堂してこの因縁を取り挙げたところ、黄檗は聞いて、古人は錯って学人に答えたために野狐に墮したが、もし錯らなかつたらどうなったかと質問した。懷海が前に進み出るようにいうと、黄檗は出てすかさず懷海に平手

打ちした。懷海は手を拍って笑い、「將為（謂）胡鬚赤、更有赤鬚胡」と言った。

將為云云は、胡人の鬚は赤いとばかり思っていたが、赤鬚の胡人（ということ）があつたのだ、という意味である。この公案は多くの人に拈提され、問題意識も深まったが、しかし問題点は多岐にわたってきた。道元が「行仏威儀」「阿羅漢」「大修行」「一顆明珠」「礼拝得髓」「夢中說夢」「三十七品菩提分法」で問題点としたのは、道元の禪に対する信念にもとづく独自の公案の読み取りという面は明らかであるが、公案を通して宋朝禪を総括する一面もある。のみならず、因果論は「深信因果」で大いに変貌を示すように思われる。拙論はそこまでは到底とどかない。今は胡鬚赤に絞る。

四 胡鬚赤赤鬚胡の語の用い方

公案では「將謂胡鬚赤更有赤鬚胡」として用いられており、本来はこのように使用されるべきであろうが、道元の場合、二で使用例を示したように、必ずしもそうばかりではない。少々の修辭上の変化は中にあるが、③⑤⑥⑦⑧⑨は公案と同じ使用例である。しかし①②④は道元独自の使用法である。この独自の使用の仕方について考えてみよう。

①は「希有赤鬚胡」という。希は稀で「まれに」という副詞である。「更有赤鬚胡」という原文の「更」は「そのほか

に」という副詞である。「別更」（ほかになお）という表現と同じである。更と希とを比べてみるならば、希の方がきつい表現である。胡鬚赤と想っていたが、そのほかに赤鬚胡があったのだ、という慨嘆を含んだ公案で用いる表現よりも、稀に赤鬚胡もあるのだ、というように、かえって発見した驚きを示すことばとして道元は表現している。発見した驚きとは一体何なのか、これを解くために試論を提したい。

文体上から比較する。将謂と有は説者の意志であるから除外する。問題は胡鬚赤と赤鬚胡の違いである。胡鬚赤は平叙文である。胡鬚（複合名詞）は主語、赤は述語である。「胡人の鬚は、赤い」である。一方、赤鬚胡は複合詞である。赤と鬚は修飾関係（赤い↓鬚）として複合しており、赤鬚と胡は修飾関係（赤鬚↓胡）として複合している。複合詞はいわば単語であって文ではない。結局は文と単語の違いとなる。文は主語述語が具足して叙述となる。単語は叙述とはならない。一つ概念を示すのみである。そこでかなり冒険ではあるが、この違いを仏教の理論面と照合してみたい。

胡鬚赤と赤鬚胡は文と単語である。偶然ではあるが、文字の配置も全く逆である。文によって示されることは、多分に縁起論的表現である。単語は概念をポツンと示すだけであるから、多分に空観論的表現である。いみじくも「大修行」において、「与掌と拍手と、一は有、二は無。赤鬚胡は胡鬚赤

なり」（河村孝道氏の竜門寺本による読み下し）という。有的表現は胡鬚赤で、無的表現は赤鬚胡である。有的表現は詮で、無的表現は遮である。修証よりみるならば、胡鬚赤は修とみることができ、赤鬚胡は証とみることができよう。さて62上堂に戻して以上の考察を適用するならば、「希れ」に「有る」のは証ということになる。修の上から体得し来ったものは胡鬚赤であり、そうとばかり思っていたら、稀なる体験の証からは、赤鬚胡と体得された、と驚きを示した語となる。

62上堂で「因果更因果」とは、「不落因果」と「不昧因果」と言ったことを指すが、しかしそれだけではなく、上の因果は不落因果と言ったのが因で野狐身という果となり、不昧因果と言ったのが因で野狐身を脱するという果となったことを意味する。この流転相をいうのである。道元はそれを扨下して下座したのである。これはまさしく「赤鬚胡」の空観的表現の所作とみられる。

次に②「行仏威儀」の使用法について考えてみよう。ここでは公案でいうところと言葉が逆で、「将謂赤鬚胡のみならんや、さらにこれ胡鬚赤なり」という。「行仏威儀」は長文である。その中の雪峯の示衆の「三世諸仏、在火焰裡、転大法輪」という語と、玄沙の「火焰為三世諸仏說法、三世諸仏立地聴」といった語を拈提した上で、道元が上記のようにい

ったのである。「三世諸仏の転法輪の道場は、かならず火焰裡なるべし。火焰裡かならず仏道場なるべし」と、行仏の様を説く。そして雪峯が言ったことより玄沙が言った方がすぐれているという見方に対して厳しく批判し、玄沙は三世諸仏が説法するとはいっても、決して転法輪すとは言っていないとし、三世諸仏の聴法は諸仏の法なり、という。これは雪峯の言おうとするところ、玄沙の言おうとするところは立場を異にする」と指摘するのである。同じ土俵の言ではないということである。従って優劣は立てられない。そして「將謂赤鬚胡のみならんや、さらにこれ胡鬚赤なり」と道元はいったのである。①の使用法とは違う。赤鬚胡という表現とは全く別に胡鬚赤という表現もあるということである。ひらたくいうならば、発想転換しないと、雪峯より玄沙の方がすぐれているということになってしまおうというのである。赤鬚胡と胡鬚赤が逆になっているのは、道元が注意させるためにわざと表現を変えたともみれるし、雪峯が空觀論的の禪者、玄沙が縁起論的の禪者であるからともいえないかもしれないが、なまじっかこ

こでの雪峯の言は衆生に対する諸仏の威儀であるから、縁起論的で、玄沙は三世諸仏の自受用三昧の威儀であるから、空觀論的となろう。だからその穿鑿は意味がない。要は別次元であることを示そうとしたに過ぎない。

次に④の使用例について考えよう。「大修行」は百丈野狐

話の公案を道元独特に説き明したものである。道元が大修行という場に立つて見解を明らかにするについて、少しく参考になっているものがある。それは『宗門頌古聯珠通集』巻一〇に載せている百丈野狐話に対する靈源惟清の頌である。それは次のようにいう。

明明道不落、老人何曾錯。的言不昧、百丈何曾會。不会將不錯、渾然宣妙覺。不落与不昧、卓爾標正位。全機因果有来由、脱体升沈無忌諱。非自非是誰是（脱字あるか）、言下迷宗生擬議。

「深信因果」で「おほよそこの因縁に、頌古・拈古の輩、三十余人あり。一人としても、不落因果これ擬無因果なり、と疑ふものなし」といっている。深信因果と大修行とは、不落因果を説くに根本的に違う。今はそれは措いて、この三十余人とは聯珠通集の琅琊覺以下の続収分を除いた公案に頌した人たちをいう。道元はこれを見ていたのである。だから靈源の語は見ていたはずである。ただ妙覺とか正位とかの語は、道元にはなじまないであろう。頌は多くは因果に目が向っているが少しばかり胡鬚赤赤鬚胡にも着語している。しかし道元は枯木法成とか一、二を除いて、それらには納得していたとは思われず、それで大修行の示衆となつてあらわれたのであろう。

公案の最後のところについて、百丈と黄檗を評し、「しかあれどもいふべし、百丈道処通方、雖然未出野狐窟。黄檗脚

跟点地、雖然猶滯蟻蟬徑。与掌拍手、一有二無。赤鬚胡胡鬚赤」としめくる。竜門寺本によれば、赤鬚胡は胡鬚赤なり、と読めるということである。『御抄』はこのところは、大いに会通している。一先ず御抄に従えば、百丈の通方と黄檗の脚跟点地と、意味は同じで、仏祖道にあるをいうとする。また与掌と拍手、有と無、赤鬚胡と胡鬚赤、とはいうが、差別はないとする。ここでは赤鬚胡と胡鬚赤が一枚であるということ、通常の用い方とは異なる。道元はこのようない方もしているのである。

最後に③⑤⑥⑦⑧⑨は公案と同じ「将謂胡鬚赤、更有赤鬚胡」である。③「阿羅漢」では、凡夫の見解ではなく、次元を異にする阿羅漢の立場に立たねばならぬことをかく述べる。⑤は、六祖に至るものは没可把である。修行によって体得したものは露柱古仏、燈籠新如来と、禅機をもって没可把を表現する。その修を一層向上せんとすれば、胡鬚天下に赤し、という修であつても、もともと赤鬚胡という証による修だったのだ、という内容である。⑥は国師三喚の話の拈提で、吾孤負汝と思つていたのが胡鬚赤で、実は汝孤負吾と気づくのが赤鬚胡と表現される。ここではもう一段、国師の落処が老野狐であつたことをいわんとする。老野狐は「大修行」を通して理解すべきであらう。⑦は連例の長い上堂語だが、仏法は外道とちがうことを更有赤鬚胡といったのであ

る。⑧は趙州の宗旨と永平の宗旨が一等であることを述べ、「画餅」「葛藤」を通してみた時、翠竹桃華、胡蘆藤種が胡鬚赤、是画図・纏胡蘆が赤鬚胡であるといえそうである。河村孝道氏の注解に従えば、画餅（尽有一切）は胡鬚赤とみられ、不充飢（存在の無底性）は赤鬚胡とみられ、縁起的表現と空觀的表現との相違をいうものと理解できる。⑨は修行の重さを強調した上堂語である。在单多劫の禅客は拄杖が黒いのを見るが、脱落底があるか自問し、更に赤鬚胡有り、と答える。胡鬚赤は修、赤鬚胡は証をいい表わそうとする。修と証が一如だとしても道理にははつきり区別のあることを示す。以上のごとくみてくると、これらは①で述べたことを出ない。

五 まとめ

胡鬚赤と赤鬚胡が意味するところは用例の①と②であつた。即ち①から、胡鬚赤は縁起論的表現、詮の性格、修の面でとらえられ、赤鬚胡は、空觀論的表現、遮の性格、証の面でとらえられる。②から、胡鬚赤という観点と赤鬚胡という観点は全く違うということで、観点の違い・発想の違い・次元を異にした見方、をいう場合に用いられる。

これらは将謂胡鬚赤更有鬚胡の一般的使用とほぼみてよいが、ただし道元において修と証とに配当してしばしば見られ

るとすれば、それは道元の禅旨から出てくるもので、縁起論的と空観論的に配当して見られるとすれば、宋朝禅乃至中国禅そのものの体質として濃厚な空観論的禅に対する、道元の厳しい批判を具えていると理解できよう。つまり宋朝禅の修と証との関係を空観論的であるとみると、道元は空観論的が縁起論的であるとするので、修証論は一変し、道元独特の修証論となる。しかし独特というのは、中国禅が多分にそれ（縁起論）を欠落させていたからで、道元は仏祖に親しく表現されているとして、幾多の仏祖の言葉を用いて証明してみせるのである。道元は徐々に縁起論的傾向を濃厚にしていくように思われる。それは証よりも修に力点が置かれていくことになる。

六 余論

前に百丈野狐話が一〇三〇年ごろ世に現われ、発生は安徽地方ではなかったかと述べた。このことは別の機会（愛知学院大学文学部紀要第二五号）に論ずるが、将謂胡鬚赤更有赤鬚胡の表現とごく類似するものがある。それは「将謂猴白更有猴黒」という言葉である。『雲門広録』に出ている。『景德伝燈録』では投子大同章に、趙州が「我早侯白、伊更侯黒」と言っている。ところが『祖堂集』にはなく、雪峰の拈語として「将為我胡伯、更有胡伯在」となっている。そして秦少游

の『淮海集』で「侯白侯黒論」が示される。圖悟は「将謂猴白更有猴黒。互換投機、神出鬼没」といつているけれども、『祖庭事苑』では、和靖の詩を証拠に、猴を侯と改め、侯白侯黒としている。しかし胡鬚赤赤鬚胡が表現として現われると、そちらの方が好まれ、侯白侯黒は消えていったというところであろう。このことも別の機会に論ずるつもりでいる。

〈キーワード〉 道元、百丈野狐話、修証論、侯白侯黒

（愛知学院大学教授・文博）

新刊紹介

伊藤唯真 著作集 第三巻

仏教民俗の研究

A5版・四七〇頁・定価一三、五〇〇円

法蔵館・平成七年一〇月